三　谷風梶之助

横綱を締めた谷風梶之助（二代目）は、余呂米の出身である、という云い伝えがある。前話に述べた「六」も、同じ家の出だという。

谷風梶之助について『郷土小坂』（物語）は、次のように紹介している。

二代目谷風は小坂は川上余路米の出身であるといふ。彼の幼名は与四郎、鎌倉時代頼朝公よりまたぎの免許を得た彼の佐多六（定六）の血統を引いたものといってゐる。明和の頃か（注・一七四～一七七）与四郎の家は大そう貧困に陥ったので四散し、夫孫十郎をのこして妻は与四郎（十二歳）とその弟（六歳）を連れて放浪の旅に出たのであった。放浪する事数年にして仙台方面に至り或る農家の後妻に入ったとか。余路米を出る頃の与四郎（十二歳）は幼いのにも似ず偉丈夫であったといふ。仙台に行ってから彼の体格物すごく肥満した。彼は力士を志して江戸に上り其の頃の天下の力士関の戸住右衛門の弟子に入ったのである。時に年十九歳であった。

江戸時代は角力等は唯一の娯楽で天下の諸大名は争って力士をかゝへたの

である。

彼与四郎は天性の偉丈夫なる上角力を喜んで稽古し、其の技は日に上達したのである。

やがて与四郎の名を改めて秀の山と号し、各地を巡って角力をとること七、八年、二百数十回に及んだが、其の間敗を取ること僅に十一回、勝負なし廿七回、其の余は悉く勝利を得たと伝へられてゐる。而して年廿七にして谷風梶之助と名乗り、身の丈六尺重さ四十三貫といふ本朝稀れに見る力士となった。

何時頃か彼は地方巡行の折毛馬内に角力を興業した。其の時の事である。

此の川の上に俺の親父が居る筈だといふので呼び寄せようとして使をやった。処が余路米に居る父は貧困のどん底にあったので到底毛馬内に出る事は出来なかった。

その由を聞いた谷風は金五十両づつを二つに包み一つを我が父に、一つを父の兄に渡してもらひ、我が父を仏にしてもらひ度いと毛馬内に居る叔父(作内)に頼んで此の地を去ったといふ。

其の他余路米には梶之助の大力であった事を物語るに足る話は幾つも伝ってゐる。

かって大阪での興行の時大阪力士の豪の者を五人づゝと毎日取結んで、十日間続けたが一回も負を取らなかったといふことである。

然るに今梶之助は仙台は霞目村の一農家に生れたものとして伝へられ、其のなきがらは仙台荒町東漸寺に葬られて居るといふことである。